

強者の戦略

英語から学ぶ1「思索のアルバム(3)」

Philosophical Investigation (『哲学探究』)の序文第1パラグラフから読み取れるのは、本書が Wittgenstein の巡らせた思索をそのままの順番で書き記したものであること、そしてそれ故に議論がある主題から別の主題へと変転してゆくということでした。これは普通の書籍では考えにくい構成ですが、Wittgenstein は「思索がある主題から別の主題へと、自然な順序で、そして途切れることなく進んでゆくことこそが本質的である」(the essential thing was that the thoughts should proceed from one subject to another in a natural order and without breaks)と述べています。第2パラグラフはこの発言の真意を説明するものとなっています。

第2パラグラフは5つの文から成ります。1文ずつ内容を吟味してゆきましょう。

【第2パラグラフ1文目】

After several unsuccessful attempts to weld my results together into such a whole, I realized that I should never succeed.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

コンマの手前まで (After ... whole) が副詞句です。“attempts to weld ...”は動詞 attempt to V (Vしようと試みる) が名詞化したもので、「...を接合しようとする試み」と訳すと良いでしょう。なお、動詞 weld は「...を接合する、統合する」という意味で、多くの英和辞典で難単語に指定されています(が、強者を志す人にとって「知らない」では済まされないレベルです)。“my results”(私の結果)は一体どういう意味でしょうか? パラグラフの冒頭文ですので、前パラグラフと対応関係にあるのではないかと当たりをつけて読み返してみましょう。結論から言うと、“weld my results together into such a whole”の部分が第1パラグラフ4文目の“bring all this together in a book”(この全てをひとまとめにして本にする)に対応しています。“all this”は前文の“remarks”(注記)、更に遡ると“the thoughts”(思索)を意味しているので、そのことも意識して訳出すると良いでしょう。

主節は第3文型になっています。動詞 realize は物事の重要性に気付くことを表すので、目的語の「that I should never succeed」が「I」(すなわち Wittgenstein)の気付いた内容ということになります。なお、“succeed”(成功する)は直前の attempts の内容に成功することを含意しています。

【第2パラグラフ1文目 和訳例】

私の思索の結果を接合しそのようなひとつのまとまりにしようとする試みが幾度か不首尾に終わった後、私はこの試みが決して成功しないだろうということに気付いた。

上述の内容に加えて考慮したポイントとしては、助動詞 should の訳出があります。that 節内にある should は和訳の際は無視することが多いですが、ここでは助動詞 shall (この場合は単純未来「~するだろう」の意

強者の戦略

味) が時制の一致によって過去形 *should* になったものと解釈して訳に反映しています。

第1パラグラフで、Wittgenstein は自らの思索を体系的に整理することに失敗したと述べていましたが、この文からはその試みが複数回行われたこと、そしてその挙げ句に「決して成功しない」と考えるに至ったことが読み取れます。「思索がある主題から別の主題へと、自然な順序で、そして途切れることなく進んでゆくことこそが本質的」という Wittgenstein の宣言は、彼自身の失敗の経験からの一般化だったのでしょう。穿った見方をすれば、個人的経験だけを頼りにした主張なので、普遍的なものとして鵜呑みにしない方が良さそうです。

【第2パラグラフ2文目】

The best that I could write would never be more than philosophical remarks; my thoughts were soon crippled if I tried to force them on in any single direction against their natural inclination.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

少し長めの文ですが、セミコロン (;) のところで区切って読み下してゆきましょう。セミコロンの手前の文は、主語が関係詞節になっていることと“more than philosophical remark” (哲学的注記以上の) の訳出に注意するだけで良いでしょう。セミコロン以下は *if* 節を伴う複文 (主節+従属節) になっていますが、“crippled” (障害のある) がかなりの難単語であることを除けば構造把握に困ることはないでしょう。問題は、日本語でどう表現するかです。

【第2パラグラフ2文目 和訳例】

私が書き記すことのできる最善のものは、哲学的注記以上のものには決してなりえないだろう。私とその思索を自然な思索の性向に反して単一の方角に進ませようと試みても、私の思索はすぐに重大な障害を抱えたものになってしまった。

訳出するに当たり、次の3点に注意しています。

- ① セミコロンは接続詞 (*and* など) の代理として用いられることが多いです。この文の場合、前半の内容を後半が補足説明する関係になっています。
- ② *if* を「条件」ではなく「譲歩」を導くものとして解釈しています。*if* は譲歩を導くときは「*even if*」の形をとるのが一般的ですが、*if* 単独でも譲歩を導くことがあります。
- ③ 「*force them on in any single direction against their natural inclination*」は前文までの内容を要約したものになるよう意識しました。

強者の戦略

【第2パラグラフ3文目】

—And this was, of course, connected with the very nature of the investigation.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

3文目はダッシュ（—）で前文と結ばれています。ダッシュはコンマ（,）と同じ働きをすることもありますが、ここでは「抽象—具体」の関係を導く働きをしています。つまり、この文（3文目）は前文（2文目）の具体的説明に当たります。

【第2パラグラフ3文目 和訳例】

そしてこのことがこの探究のまさに本質に結びついていることは言うまでもない。

this はそのまま「このこと」と訳していますが、正確には前文の内容（Wittgenstein が書き記すことのできる最善のものは、哲学的注記以上のものには決してなりえないだろうということ）を指しています。そして“the very nature of the investigation”（この探究のまさに本質）が意味するのは、第1パラグラフ5文目で“the essential thing”として述べられていたこと、すなわち“the thoughts should proceed from one subject to another in a natural order and without breaks”（思索がある主題から別の主題へと、自然な順序で、そして途切れることなく進んでゆく）であると考えられます。

【第2パラグラフ4文目】

For this compels us to travel over a wide field of thought criss-cross in every direction.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

文頭の“For”は接続詞で、前文の理由を導きます。「SV-, for S'V-」（SV-, というのも S'V-だからだ）が基本形ですが、「SV-. For S'V-」のように2文に分けることができます。ただし、「for S'V-」は前文に対する理由を導くため、「for S'V-, SV-」や「For S'V-. SV-」のような語順をとることはできません。this は前文の this を引き継いでいる、つまり同じ対象を指していると考えて良いでしょう。“criss-cross”は見慣れないかもしれませんが、ここでは「交差して」という意味の副詞になります。

【第2パラグラフ4文目 和訳例】

というのも、この探究は我々に幅広い思索の領域をあらゆる方向から交差して旅することを強いるからである。

この文を訳す際に、“travel”をそのまま「旅する」として良いかどうか迷うかもしれません。“trave around”には「次々に思い出す、見て回る」という意味もあり、そちらのニュアンスでも文意は通じるように思われ

強者の戦略

ますが、上の訳文では敢えて「旅する」と直訳しています（理由は後述します）。

【第2パラグラフ5文目】

—The philosophical remarks in this book are, as it were, a number of sketches of landscapes which were made in the course of these long and involved journeyings.

Ludwig Wittgenstein, translated by G.E.M. Anscombe (1953),
Philosophical Investigation, Basil Blackwell, p. vii

この文も前文とダッシュで結ばれているので、2・3文目と同じ関係（すなわち抽象—具体関係）が4・5文目にも成り立っていると考えられます。また、文中の“as it were”（言わば）は比喩を導く表現で、“a number of ...”が“The philosophical remarks”を比喩的に説明したものになっています。

【第2パラグラフ5文目 和訳例】

この本のその哲学的注記は、言わば、これらの長い間かかりきりになっていた旅の途中でなされた多くの景色のスケッチのようなものである。

比喩であることを明示するため、文末は「～のようなものである」としました。先ほど4文目の“travel”をそのまま「旅する」と訳しましたが、これは“these long and involved journeyings”に呼応していると考えられるからです。

以上の5文から成る第2パラグラフは、Wittgensteinが自らの思索を体系化することを断念し変遷する思索をそのまま *Philosophical Investigation* に掲載することを決意するに至る思考を説明したものになっています。ここで注意しなければならないのは、Wittgensteinが第1パラグラフ5文目で「本質的なこと (the essential thing)」と述べたものはあくまで Wittgenstein 自身にとってのそれであり、万人にあてはまる普遍的なものとして述べられたものとして受け取るべきではないということです。第2パラグラフの記述を読む限り、Wittgensteinは自身にとって最善のものが哲学的注記 (philosophical remarks) であること、そしてそれ故に変遷し続ける思索こそが *Philosophical Investigation* の本質であること、それ以上の意図は読み取れないように思います。

次回は、いよいよ“this book is an album”の登場する第3パラグラフを見てゆきます。